

(26) 群馬県みどり市の原鉱山

参考文献（１）を手引きに、幾つもの鉱山跡の訪問・探査をした。この文献を案内書として、数回の探査でも、鉱山跡を確認できなかった一つが、この「原鉱山」である。参考文献（１）には、この鉱山では、石英脈中に金、自然蒼鉛（ホセ鉱）等が見られる、との紹介記事がある。また、文献には、明瞭な現地近傍の地図が掲載されていたので、簡単に鉱山跡にたどり着けると思ったのであるが。ただ、文献の出版年が２００８年なのに、文献著者の現地訪問の実施年が３０年以上も昔であったことは気になってはいた。それでも、何回か探査を行ったわけなのであるが。結局、探査は諦めそのままになっていた。

この4月、現地を再訪問する機会があった。幸運にも、鉾山跡について知見のある現地の人から話を伺うことができた。先の探査場所とは全く違う沢の上流であることを教えて貰った。結果、「原鉾山」跡を確認することができた。現地は、沢の斜面上に石垣組みのプラトーを持ち、幾つかの坑口も残っていた。石英の脈も確認することができた。プラトー辺り一面、粘板岩のズリである。が、脈石である石英塊を探し出すのは一苦労であった。現在では表面採集だけでは難しいかもしれない。

原鉾山跡を確認することができた。参考文献(1)の地図中に記されている鉾山跡の位置マークは間違いであると判断した。思うに、参考文献(1)には、栃木県日光市の「銅藏鉾山」跡も紹介されている。この鉾山跡へも、何度か現地を訪問したのであるが、確認することができなかった。が、最終的に、付近の自然公園らしい所で出会った現地の方に話を聞くことができた。何と、少し先の多段の斜面崩れ防止箇所が、鉾山跡です、と教えて貰った。その助言のおかげで、鉾山跡を確認し、本探査記に報告を掲載している。参考文献(1)でマーキングされている鉾山跡の位置は、「真」の鉾山跡とは距離で1 kmも違っていたのである。今回の「原鉾山」の場合も、著者は同じような間違いをしたのであろう。現地紹介には、確実な地形図を使用しないで、手書き地図上へのマーキングで行う場合には、少し確実な目標物を取り入れた図とするなり、説明文等が必要であることを痛感した。

現地への経路は次の通りである。桐生からは122号に入り、渡良瀬川沿いに、足尾方向に進んでいく。わたらせ溪谷線の神戸（ごうど）駅当たりから見て、北側の山中に、つまり進行方向の左手の山中に鉱山跡がある。122号当たりから徒歩で30分ぐらいか。標高差は大凡150mであった。

ともかく、文献（１）に従っては、「原鉦山」にはたどり着けない。この文献は一般市販されている。本探査記が、「原鉦山」を訪問したい読者の役に立ってくれればと思っている。

鉾山跡訪問後、時間があれば、足尾まで足を伸ばし、「足尾歴史館」を訪れるのもよいであろう。足尾鉾山産の鉾石類が多数展示されている。又、近くの「足尾銅山観光」を訪れるのもよい。トロッコに乗って銅山の坑内見学ができる。

数年前数度、そして2015年4月探査



図1 国土地理院の地図サービスより複写掲載。赤丸が確認した「原鉦山」跡。赤×印は参考文献(1)に記されている「原鉦山」跡。



図2 図1の部分拡大図。Gがガソリンスタンド（2015年4月現在）。122号から、このガソリンスタンド脇の道へ入っていく。直ぐに、右側に延びている道に入り、先へ先へと登って行く。途中までは車の通行可であった。適当な所で、車を降り、沢に沿って、杉林の中を歩いて登って行く。黒線が書き入れた道である。途中から林道となり、直に林道も消えかかり、広い沢に沿って杉林の中を登って行くことになる。現地近くで、進行方向右側の斜面を登り上がると現地である。122号との標高差は大凡150m。

鉱山跡写真



写真1 122号を東進してきた。東町神戸地区で、左手に石油スタンドの看板のある（2015年4月時）所で、左折し、村道に入る。



写真2 村道に入ってから少し先で、右側に分岐村道が延びている。この村道に入っていく。道の先は大きく左に曲がっている。



写真3 登ってきた林道の途中の様子。杉林の中で、前方では林道が消えかかっている。が、広い沢に沿って登っていく。村道に入ってから標高差が100m以上になったら、広い沢の右側斜面に注意して登って行く。斜面にズリらしい跡が見え、その上方に石垣のテラスが見える箇所がある。現地である。



写真4 見つけた坑口。石垣の上にあるプラトーの所にあった。



写真5 坑口の全面の様子。坑口の左側に、余り厚さのない石英脈が確認できた。坑口を少し入って右奥には数十cm厚の石英脈も確認できた。この石英脈は一見の価値あり。



写真6 写真5で示している坑口の内部の様子。



写真7 写真5で示している坑口に向かって、左の方の斜面にあった別の坑口。入口が埋もれかかっていた。



写真8 写真7で示した坑口の内部の様子。坑道は長方形に開削され、水平に延び、かつ、しっかりしている。先にある鉱脈への通道坑としたものであろうか？

鉱物写真

なし

参考文献

(1)「鉱物観察ガイド」、松原 聡、東海大学出版会、2008年。